



キャンパス / 青森県青森市、東京都江戸川区、青森県むつ市 学生数 / 1,208人 創立 / 1968年  
 学部 / 総合経営、社会、ソフトウェア情報、薬  
 経営 / 学校法人青森山田学園  
 設置校 / 青森山田高校、青森山田中学校、呉竹幼稚園、蟹ヶ丘幼稚園、北園幼稚園、青森県ヘアアーティスト専門学校

ビジョン	地域とともに生きる大学
課題	① 大学経営の安定に結びつく学部構成の構築（東京キャンパス将来構想を含む） ② 適切な学生の確保 ③ 経営・管理及び、財務状況のさらなる改善 ④ 学生の学習を支援する教育施設・設備整備

## 重点施策 / 次世代の地域社会、経済を支える若者の育成を担うため、むつ、青森、東京の3キャンパスを行き来する新しい学びにより世界とつながる

学びたいことを学びたい場所で「東京で学べる地方大学」のしくみ

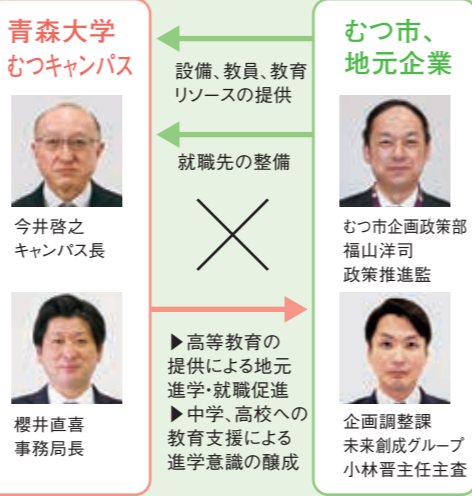
キャンパス	学部	学生数*	教育の特色
青森(青森市)	薬学部 / 総合経営学部 / 社会学部 / ソフトウェア情報学部	日本人学生: 1,017人 / 留学生: 26人	▶ 全学共通の基礎スタンダード科目はリアルタイムのオンライン授業でどこでも受講可能 ▶ 担任制・少人数教育 ▶ 東京キャンパスについては希望により、日本人学生は1・2年生の間の最長2年間、留学生・社会人学生は4年間で在籍が可能
東京(江戸川区) ※2019年～	総合経営学部 / 社会学部 / ソフトウェア情報学部	日本人学生: 6人 / 留学生: 114人	▶ 起業家を教員に迎え、中小企業の後継者や起業家、IT技術者、地域社会の変革者を育成 ▶ 副専攻制度を設け、ITなどの分野も学べる ▶ 3・4年次の科目である3か月の長期インターンシップ(各12単位)の受講用や、就活用に施設・サービスを利用可能 ▶ 国際交流センターが就職支援も含めて留学生をサポート
むつ(青森県むつ市) ※2022年～	総合経営学部 / 社会学部 / ソフトウェア情報学部	日本人学生: 27人 (全員むつ下北エリア出身)	▶ 次世代の地域社会、経済を支える若者を育成 ▶ 地元自治体職員や地域住民を教員やゲストスピーカーとして迎え、さまざまな角度からむつ下北を知る基礎スタンダード科目「あおり学」や、地域社会の課題解決を探究する「創生コア特講」など(いずれも対面)を提供 ▶ 地域のイベントへのボランティア活動や、地元高校向けのSNSの使い方やプログラミング講座への学生参加など、地域連携活動にも積極的に取り組んでいます。

\* 各キャンパスでメインに学ぶ人数

## 注目! 地域に大学を！ 大学と市がリソースを出し合い 若者の進学と地域活性を推進

大学の誘致が長年の悲願だったむつ市。誘致のため、施設として「大学生が通いやすい建物」と、中心部の文化会館を改修し無償で提供。加えて職員を教員として出向させる他、市長や市民も授業に関わる。その結果、初年度は進学を断念したり、県外に進学していたはずの学生が15人入学。そのうち4人は修学支援新制度を利用した。大学によると、学生は学修意欲が高く、その学ぶ姿勢に惹かれ、オンライン科目でも他キャンパスの担当教員が足を運び、対面授業をすることもあるという。地元企業も魅力ある企業になると、協議会がつくられた。今後は新しいむつ市の計画づくりにも参加する予定だ。大学進学率が低いエリアだが、地元キャンパスがあることで、中高生の大学見学も実施でき、進学意識の醸成にも役立っている。一方で、下北出身者だけが集まるのでは視野が狭くなるため、積極的に他キャンパスとの交流も図っている。「この春から1期生2人が東京で学ぶ。一方で東京の学生が学びたいような、むつキャンパスの魅力を打ち出していきたい」(櫻井事務局長)。

### むつキャンパスのスキームと各担当者



# 特色の異なる3拠点キャンパスで挑む 地域の人材育成と活性化

## CASE STUDY

# 青森大学

2019年に東京都江戸川区、2022年に青森県むつ市に新キャンパスを開設した青森大学。大学空白地帯にキャンパスを開設した経緯と教育にかける意気込みを理事長に聞く。



青森山田学園理事長

## 岡島 成行

おかしまじげゆき ● 1967年上智大学文学部卒業。1969年読売新聞社入社、1980年より環境問題専門記者となる。1983～84年米国ワシントン大学客員研究員。1999年青森大学大学院教授。2002年同大学客員教授、大妻女子大学教授。2014年より現職。

### 地域から高校がなくなり 18歳は出たきり戻らない

本学は、1968年に開学した青森市唯一の私立総合大学ですが、私が9年前に着任した当時は、倒産一歩手前。そのとき、地方大学の使命は東京の大学のまねではなく、地域の担い手育成だと捉え、思い切った改革をしました。真つ先にしたことは、この土地にどんな大学が必要か、地元のニーズを聞くことでした。若者は都市部に出て行き、残った者は視野が狭い。地元中小企業の事業継承者は不足し、新規事業も未成熟。大学進学率は低く、その主な要因は大学が少ないことと、世帯年収の低さだとわかりました。また、「東京に出ると若者はほとんど帰ってこない」という地元企業からの声もあり、「東京で学んでも青森に帰ってくる」方策を

考えました。その結果が、東京キャンパスの設置です。青森と東京を行き来しながら地域の課題と魅力を再認識する教育で、青森を支える人材づくりに着手しました。そして、2019年に東京都江戸川区にキャンパスを開設。校舎は、江戸川区のご厚意で元小学校を無償で貸していただきました。産業の集積地・東京で、地域の課題である中小企業の経営と起業をテーマとした学びを展開しています。

2022年には、これまで4年制大学がなかった下北半島に、文化会館を利用したむつキャンパスを開設。むつ市では、18歳の多くが地元から出ていきます。世帯年収が低く、進学を断念する高校生も多かった。地元企業があれば、修学支援新制度を活用して進学できます。実際、今では地元出身の27人の学生が学んでいます。1期生の半数以上が地元に残る意向で、地元企業は大いに期待しています。ただし、経営上赤字では継続できません。そのため、施設と地域連携教育のための教員は自治体が提供、授業はオンライン活用を条件にしたスキームで取り組んでいます。薬学部以外の学生は、希望により1・2年次は最長で2年間、東

京で学ぶことが可能なら、3・4年次は東京での3か月のインターンシップを履修できます。東京では留学生も多く学んでおり、国際感覚を養うこともできます。このような「東京で学べる地方大学」の特徴を生かして、東京でも学生募集をした結果、今年は15人が入学しました。

### AIチャット利用前提のこれからの教育

IT技術によって社会が大きく変わる中、10年先を想定して教育を考えています。3拠点キャンパスが成立するのも、オンライン授業の活用があつてこそ。チャットGPTも然りです。今後はAIが過去の知見をまとめ、人の役割は新しいものをクリエイティブにすることになる。一方通行の講義は必要なくなり、クリエイティブにふれる授業を提供する大学に学生が集まるようになるでしょう。2022年度には青森の宝である自然を利用したフィールド・ツーリズム専攻を新設しました。地域にしかないものを生かす教育や人材発掘にこそ、地方私大は活路を見いだすべきです。地域に根付き、枝葉を伸ばす本学の挑戦は、全国の過疎地のための挑戦です。

取材・文 / 本間学 撮影 / 成田真治